
バカと女装と召喚獣

ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと女装と召喚獣

【Nコード】

N2754T

【作者名】

ユウスケ

【あらすじ】

お金持ちの家に生まれ頭もよくハーバード大学を主席で卒業した九条 優

彼はむかしから普通の学校生活に憧れ、ついに自分の思いを両親に話す。

両親の反対はなかったが条件をつきつけられた、その条件とは・・・

この小説の作者は素人で、駄文です。

プロローグ（前書き）

前から書いてみたいと思っていたので書いてみました。
これからも見ていただけると幸いです。

他の小説と同様に完結を目指して頑張ります。

プロローグ

プロローグ

僕の名前は九条くじょう 優ゆう。

父様は大企業の社長で母様はインターネットで株の売買をしている。いわゆる金持ちというヤツだ。

しかし僕はとある頼み事をするため父様と母様がいるリビングに向かう。

いつも忙しい二人だが今日は休みで二人とも自宅に居るのでちょうどよかった。

「父様、母様、実は頼みがあります」

「なんだ、優」

「優君？」

二人はリビングで優雅に紅茶を飲んでいた。

僕は空気を壊して申し訳ないと思いつつ二人に話を切り出す。

「実は、僕は普通の高校生の生活がしたいのです」

「何を言っているんだ？優、お前は高校も大学も卒業しただろう」

僕が頼み事を言うと、父様はワケがわからないという感じに僕を見て話す。

確かに僕は飛び級で高校も大学も卒業している。

しかし同じ年の友達と遊んだり勉強したり世間一般の普通をしたこ

とがない。

だから僕は普通に憧れた、だから普通の高校生活がしてみたいと思うようになり

今日ついに話したのだ。

この事を父様と母様に説明すると・・・。

「わかった、いいだろう」

「そうね、私も反対しないわ」

「ありがとうございます！」

父様と母様の許しが出た、よかったこれで・・・

「でも、条件があるわ」

「へ？」

僕が喜んでいると突然、母様条件を突き出してきた。父様も予想外だったのか僕と声が重なった。しかしすぐに僕は冷静になり条件を聞く。

「母様、条件とは何ですか？」

「条件、それは・・・」

「・・・それは？」

僕は真剣な表情をする母様をみていきをのむ。そして母様は条件を口にした。

僕はそれを聞き絶望した。

他の条件にしてみらえないかと頼んでも母様は許してくれなかった。父様もそれはさすがにと反論したのだが母様を取り出した一枚の写真を見た事で

意見を180度かえて母様に味方した、一体なんの写真だったのか僕には

見せてもらえなかったがきつとなにかとてつもないものが写っているのだろう。

条件はのむのはつらいが念願の生活も捨てるのも惜しい……。だから僕は……。

「わかりました、その条件のみます」

―それから数カ月後―

あれから季節は春になった。

現在僕は文月学園の学園長室に來ている。

何故この学園の校長室に居るのかというと僕は明日、この学校に転入するため制服などを受け取りに來ているのだ。

「それにしても、あんたも大変だねえ」

「……はい」

学園長先生の同情の視線と言葉を受け僕は返事をする。

どうして僕が学園長室でこのようなやり取りをして制服をわざわざ受け取っているのかと

いうと、僕は明日から女としてこの学園に入らないといけないからだ。

そのせいで、普通に買いに行く事ができず、事情を知る学園長に頼

んで制服の注文をしたのだ

そう、母様の条件とは女として学校に通うこと。

本当に何を考えているのだろうかあの母は……。

しかしあの母様の考えだきつとなにか考えがあるのだろうか。

そして、その後は地獄の日々が始まった。

化粧のしかたから女性の仕草や口調を徹底的にこの数ヶ月間叩き込まれたのだ。

おかげで人として大切なものを沢山失ってしまった。

まあ、その日々も今日で終わりを告げた。

しかし、明日から着るであろう自分の制服を見るとおもわずため息が出てしまう。

でも、これは自分が選択したことだ不安はあるけどもう迷わない。

「それじゃあ、明日から頑張りな、九条 優香」

「はい」

こうして僕はこれから二年間住む事になるマンションにむかった。
女装ばれないといいな……

―その頃、父と母の会話―

「明日から学校だが大丈夫なのか？」

「大丈夫よ、ちゃんと1から10まで叩き込んだから、

それにあの学校の学園長には貸しがあるのだから問題ないわ
それにあなただって私に賛成したじゃない」

「それは、あんな写真をみたら思わず……」

「優君、女の子の格好がすごく似合っていたものね」

そう、優は女装していなくても10人中10人が女だと言い切れるほどの

男の娘だった、しかもかなりの美少女の部類に入るほどだ。

ちなみに写真はハーバード大学の吉井 玲という女性が送ってきたものだ。

それを見た九条の母は優の女装見たさにあんな条件を出したのだ。

「優がんばれよ・・・」

九条の父は自分の行動に後悔しつつ息子の心配をするのであった。

プロローグ（後書き）

感想をお待ちしております。

1話 Fクラス

―優視点―

朝早くに目覚まして目覚めた僕は、朝食を取り支度を整える。

そう女装もして・・・。

出かける準備は完了したしかしもしばれたらという不安はまだ残る。だから家を出る前にもう一度自分を鏡で確認する。

腰まで届く長くて黒い髪にとても強調されている胸、自分が見ても女の子に

しか見えない。

「はあ・・・」

しかし、それと同時にため息も出る、僕は男、男なのに・・・。
女の子にしか見えない自分に絶望しつつ家を出る。

しばらく歩いて学園に着く、するとそこにはスーツを着たガタイがガッチリした

男性が立っていたおそらくこの学園の体育の先生だろう。

「先生、おはようございます」

「うむ、おはよう・・・ん？ちょっと待て」

「はい、何でしょう？」

僕は先生に挨拶をして学園に入ろうとしたのだが突然呼び止められた。

もしかしてばれた？

一応笑顔を浮かべ聞く、内心は冷や汗が止まらない。

「たしか、今日転入する九条だな？」

「はい、そうです」

「ほら、受け取れ」

ふう、どうやらばれていないようだ

先生は僕が転入生だと確認すると近くにおいてあった箱から封筒をとりだし

僕に差し出す。

宛名の欄には九条 優香と大きく書かれている。
なんだろう？

「先生この封筒は一体？」

「まあ、転入生ならしかたないな、その封筒の中にはクラス編成の発表の紙が入っていて

その紙に書かれているクラスが九条のクラスとなる」

僕は封筒を開けて中身を確認する

『九条 優香・・・Fクラス』

そう、僕は編入試験は受けたが振り分け試験は受けていない。
だから最低クラスに入ってしまったかもしれないのだ。

「しょうがないとはいえ、とても残念だ九条の実力ならAクラス主席でもおかしくはないのに」

先生は本当にもつたいないという感じで僕に話しかけてくれる。僕はある程度先生と会話をして自分が指定された教室に向かう。こうして僕の学園生活が幕を開けた。

校舎に入り三階に上がり二年生の教室が並ぶ廊下に着いた。

それにしてもAクラスは大きいな。

三階の廊下に来た瞬間に一番先に目に入った。

僕が見てきた教室と比べるとかなり大きい。

好奇心からちよつと教室を覗いてみると、中はとても豪華でまるでどこかのパーティー会場のようだ。

中をしばらく見ていると見覚えのある人物を見つけた。

僕はあわててその場から離れる。

なんで！なんで、翔子がここにいるの！？

そう幼い頃、父の仕事の関係で知り合った幼馴染だ。

しかし、彼女は僕に会った際に婚姻を迫ってくるのだ。

最後に会った4年前でさえ僕に薬を嗅がせ拉致しようとしたのだ。

これは正直、正体がばれるよりも彼女に僕の存在がばれるのが一番怖い。

僕は気づかれないように小走りでFクラスに向かう。

さて、一応身だしなみをチェックして中に入る覚悟を決める。

大丈夫絶対にばれない・・・はず。

僕は勇気を振り絞り教室の扉を開ける。

「早く座れ、このウジ虫野郎」

「へ？」

僕が扉を開けると教壇に立つ、赤いツンツン頭の男子生徒が罵倒をして来た。

僕はあっけをとられ声が漏れる。

もしかして僕は何かしてしまったのだろうか？

特になにもした覚えはないのだがもしかしたら間接的に悪い事をしてしまったのかもしれない。

初対面でこれ以上状況を悪くすれば変な噂が流れて僕の学園生活に支障を来たすと思った

僕はとりあえず事情をきいて謝る事にした。

「あの、すみません私は貴方になにかしてしまったのでしょうか？
そうならば理由を聞いて

謝りたいのですが」

「・・・」

話しかけても、赤い髪の男子生徒は固まって僕の顔を見ている。

もしかして、僕の正体に気づいてしまったのだろうか？

いや、ここは落ち着いて話を聞いてみよう、もしかしたら具合が悪いのかもしれない。

「あの・・・大丈夫ですか？具合が悪いのなら保健室に行ったほうがいいですよ」

「いや！別にそうじゃないちょっと考え事をしていただけだ、それとすまないさっきのは知り合いと

勘違いしただけでアンタに言ったんじゃないんだ、気分を悪くさせてすまない」

そういつて、頭を下げる男子生徒。

ふう、どうやら彼の勘違いだったようだ。

僕は気にしないでくださいと一言いつて自分の席、というかちゃぶ台を探す。

うくん、見当たらないちゃぶ台には何も書いていないようだしもしかしたら自由に座っていいのかな？

それにしてもこのクラスは男子しかしない、女子は居ないのだろうか？

それに何故か男子全員の視線が僕と僕の胸に集中している。

一応胸は父様の知り合いが開発した見た目も感触も本物と区別がつかない人工バストを特殊な接着剤で

つけているのだ、ちなみに大きさはFでまだこのカップのものしか出来ていないとか。

もしかして今度こそ気づかれたのかな？

「よかった、他に女子が居て席は特に決まっていなから自由でいいって」

「はい、ありがとうございます」

不安に思っているとポニーテイルの女子生徒が話しかけてきた。

ふむ、女子生徒である彼女が僕を女としてみているのなら大丈夫だよな。

それにもしかしたら転入生がめずらしいのかもしれないし。

とりあえず、席に座る。

しかしこの設備はひどいな・・・。

ちゃぶ台に汚い座布団、それに隙間風が来るし・・・。

そんなことを考えているとチャイムがなった。ただで先生は来ない。

しかたがないから待つことになる。

そして・・・。

「すみません、遅れちゃいました」

「早く座れ、ウジ虫野郎」

さっきの男子生徒は僕にしたように遅刻してきた男子生徒を罵倒した。

二人はなにか因縁があるのだろうか？

「聞いてないのか？ああ？」

教壇に立っている男子生徒はまるでチンピラのように見えてきた。

「・・・雄二、何をやってんの？」

「先生がきていないから教壇に上がってみた」

そんな感じで二人の会話が続き、遅刻してきた男子生徒がこちらに
来た。

「初めまして、僕は吉井 明久よろしくね」

「私は九条 優香です、よろしくお願ひします」

彼は僕の隣に座り挨拶をしてきた。

うん、どうやら彼はいい人のようだ、これから仲良く出来たらうれ
しいな。

しかし、なんか周りの男子生徒が親の敵を見るかのように吉井君を
見ているんだろう。

もしかして吉井君は危ない人なのかな？

少し不安になりつつ先生が来るのを待つのであった。

2話 Fクラスその2

―雄二視点―

俺は今日、Fクラスの代表になった。

つまりこいつらは俺の兵隊……。

クラスメイトたちを見回し独裁者の気分になる。

こいつらには俺の復讐の手伝いをしてもらおう。

そう俺、坂本 雄二は復讐のために試召戦争をAクラス仕掛けよう
と考えているのだ。

復讐の理由は幼馴染である霧島 翔子が原因だ。

何故ならあの女は……。

―小学生のとき―

「雄二、これ飲んで」

「待て、翔子それは何だ？なんか緑色でドロドロしてるぞ」

「ユウに飲ませる為に作ったスペシャルドリンク……」

「じゃあ、そのユウってやつに飲ませてやればいいじゃないか」

「飲ませる前に実験……味の感想を聞きたい」

「ちよつとまで、今確実に実験って言ったよな」

「？」

「ごまかすな！俺は絶対にのま・・・」

「てい」

「あばばっばばばば！！！！」

「残念、失敗」

ー回想終了ー

そう、俺は小学校のある日を境に翔子の実験台となった。来る日も来る日もバイオ兵器を食わされたり飲まされたりしていた。逃げてても逃げててもかならず俺を捕まえ、実験台にする。しかし4年前の中学のある夏の日を境に俺は解放された。もしかしたら何かの罠じゃないかと思い、質問をすると。

「ユウがおいしいって言ったからもついい」

そして、俺の質問に答えた翔子はもう興味がないといわんばかりに立ち去る。

俺はこの日に誓ったのだ！いつかあいつをギャフンと言わすと！！おっと、そろそろ時間だな、先生もいない現在俺は教壇に立っている。

クラスをもう一度見回すとかなりの人数が揃い全員いるのかと思っただが、去年俺と同じクラスだったバカがいない、やつは確実にFクラスのはずだ居ないという事は遅刻なのだろう。

ちようどいい、来たらからかってやるうあいつをいじるのは楽しいからな。

バカをどういじるか考えているとき俺の近くにあった教室の扉が開いた。

来たか……。

俺は考えていた言葉をバカに向けて放つ。

「早く座れ、このウジ虫野郎」

「へ？」

しかし、俺の予想していた人物ではなく、俺の目の前に居るのは学園の女子の制服に身を包み

黒くて腰まである長い髪、とても強調された胸にまるで二次元から飛び出してきたのでは

ないかと思うほどの美少女が立っていた。

俺は美少女に見惚れて思考がストップしてしまった。

「あの、すみません私は貴方になにかしてしまったのでしょうか？
そうならば理由を聞いて

謝りたいのですが」

「……」

美少女は何か勘違いしたのか俺に罵倒された理由を聞いてくる。

正直この返しは予想外だ普通は怒ったりするものなのだがこの子は違う

少なくとも俺の周りには居ないタイプだ、喋り方から考えるとどこかのお嬢様なのだろうか？

しかし去年こんな美少女が居た記憶がない、いたとすればムツツリ
一二が盗撮して販売しているだろう。

もしかして転入生か？

「あの・・・大丈夫ですか？具合が悪いのなら保健室に行ったほうがいいですよ」

「いや！別にそうじゃないちよつと考え事をしてただけだ、それとすまないさっきのは知り合いと」

勘違いしただけでアンタに言ったんじゃないんだ、気分を悪くさせてすまない」

俺がフリーズしているのを具合が悪いと勘違いをしたのか優しい言葉をかけてくれる美少女。

俺はあわててさっきの事を謝罪する。

そうすると美少女はニコリと微笑を浮かべ気にしなくてもいいですよと一言言っつて自分の席を探し始める。

はっ、しまった名前を聞きそびれた。

まあ、後で自己紹介もあるだろうしその時に聞けばいいだろう。

それにしても周りの連中いつのまにか静かになったな・・・それにあの美少女を熱い視線で見ている。

なんかいい気分じゃないな・・・。

そんな時・・・

「すみません、遅れちゃいました」

「早く座れ、ウジ虫野郎」

バカが入ってきて俺は彼女にしたように罵倒した。

3話 自己紹介

「優視点」

あれから先生が教室に入ってきて設備の不備について聞いてくる。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入っていません」

そしてクラスメイトの男子が先生に設備の不備を申告する。

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました、ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

先生が対応してくれているみただけだ。

あれ？僕の耳がおかしくなったのかな？

まるで自分達で何とかしろと聞こえるのですが……。

「必要なものがあれば極力自分で調達してください」

先生の言葉で自分の耳は正常だとわかった。

しかし、さすが最低クラスここまでひどいなんで……。

壁は落書きで汚れているし、どこからともなくカビの臭いまでする。ここ一応学校ですよね？さすがに健康に害があるとまずいんじゃないか。

「では自己紹介でも始めましょうか、そうですね、廊下側からお願います」

たしか福原先生だっただろうか？先生の指示を受けて一人の生徒が立ち上がる。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる、今年一年よろしく頼む」

木下君の自己紹介が終わり、次に物静かな小柄な男子生徒が立ち上がる。

「・・・土屋康太」

土屋君の自己紹介が終わり次はさつき話しかけてくれたポニーテールの女子だ。

僕はこの学校の卒業まで女の子として通わないといけないので怪しまれないように

女子生徒の友達も必然的に作らないといけない、だから彼女がいいのなら友達になりたいな。

「島田美波です、海外育ちで日本語の会話はできるけど読み書きが苦手です」

あと、英語も苦手です育ちがドイツだったので、趣味は・・・吉井明久をグチャグチャにすることです」

笑顔で自己紹介をする島田さん。

さっきの前言撤回彼女は少し危ない人のようだ。

それとも友達間でのジョークなのかな？

隣の吉井君を横目でチラリと見る。

かわいそうに吉井君は島田さんの一言で怯えてしまっている。

もしかしてジョークじゃなかったのかな？

「はろはろー」

あ、笑顔でこっちに手を振ってきた。

「あう・・・し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

吉井君は困った表情で島田さんに応え、島田さんも吉井君によろしくと挨拶をする。

やっぱりさっきのは島田さんなりのジョークだったようだ。

少しやりすぎな感じはするけど帰国子女ならしょうがない。

その後次々と自己紹介が終わり吉井君の番になった。

「コホン、吉井明久です、気軽に『ダーリン』と呼んでください」

『ダアアーーーーリーーーーン！！』

野太いクラスメイト達の大合唱、もしかしてこれがテレビでも見た事がある体育系のノリと

いうやつなのだろうか？

しまった出遅れてしまった。

もしかしてつままないヤツと思われた？

クラスメイト達はその事に気づいて扉の方に顔を向けます。そこには息を切らしている女子生徒が居ました。先生は名簿をみて確認しています。

「丁度よかった、今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願います」

「は、はい！姫路瑞希といいます、よろしくお願います」

小柄な体で髪は長く美人の部類に入るであろう女子生徒は姫路さんというらしい。

女子生徒がこれで二人か・・・彼女とも友達になれるといいなあれ？

ふと僕は、姫路さんのウサギの髪飾りに視線が止まる。

ん、どこかで見覚えがあるんだけどどこだったっけ？

あれ？みんな何時の間に覆面を脱いで席に座っているんだい？

もしかしてさっきのは幻覚？

そうだよ、さすがにクラスメイトを殺そうだなんてしないよね。きっと緊張しすぎてみてしまったんだろう。

少し深呼吸をしよう。

スウ、ハア。

よし、落ち着いた。

前を見てみるとどうやら姫路さんがこちらに向かって来て僕の隣に座る。

「は、緊張しましたあ」

よほど緊張をしてしまったのか、姫路さんは机に突っ伏してしまっ

た。

お隣さんだし話し掛けたほうがいいよね。

「姫路さん、大丈夫ですか？」

「は、はい、大丈夫です」

僕が声を掛けると笑顔で答えてくれる姫路さん。

よかったファーストコンタクトは無事に成功したようだ。

しかし姫路さんどうして僕の顔を凝視しているのですか？

「あのさ、姫」

「姫路」

いつの間にか復活した隣の吉井君の声に重ねて赤毛の男子生徒が姫路さん話しかけてくる。

そつえば名前まだ知らないな……。

「は、はいっ、何ですか？えっと……」

吉井君の近くに居た彼に慌てて体をむく姫路さん。

「坂本だ、坂本雄二、よろしく」

「あ、姫路です、よろしくお願いします」

ふむ、どうやら彼は坂本くんというらしい。

ようやく名前がわかった。

それにしても姫路さんは頭をさげて礼儀正しいな。

「それで、姫路はまだ体調が悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

「はい、もう大丈夫です」

坂本君と吉井君の言葉を聞いて、どうして体調が悪いのか気になったが

下手に聞いて気分を害してしまつたらいやだと思い聞くのをやめた。それにもう大丈夫だと姫路さん本人が言っているんだし大丈夫なのだろう。

しかし体調が悪いといえば吉井君の方だと思う。

突然彼の鼻から吹き出てきた大量の鼻血、もしかしたら重い病気なのかもしれない。

「吉井君、鼻血大丈夫ですか？」

僕は吉井君に質問をした。

会話に割り込む感じだったから、気分を悪くしないでくれるといいけど。

「確か、九条だったな？」

「は、はい、そうですね・・・どうして私の名前を？」

「さっき明久と自己紹介している時に聞こえたんだ、それよりも九条、

明久が鼻血をたれながすブサイク野郎ですまない」

吉井君に質問したのですが、なぜか僕に話しかけるついでに吉井君を罵倒する坂本君。

もしかして吉井君が鼻血を出した事で僕が迷惑が掛かったと思っ
ているのだろうか？

それで鼻血を出した吉井君を罵倒しつつ友達である吉井君のかわりに謝罪したのかな？

これは少し反応に困るけど、無難に吉井君はブサイクじゃないと言
っておこう。

「そうでしょうか？鼻血はともかく吉井君はブサイクではないと思
いますよ」

「・・・そうか、まあ確かにコイツに興味をもっている知人もいる
しな」

あれ？僕の解答おかしかったかな？僕が言った後なんか少しくらい
感じがしたような気がする。

気のせいだったかな？

それにしても吉井君とても嬉しそうだね、もしかして言われたの初
めてなの？

それから姫路さんどうして吉井君にうらやましそうな顔で見ている
んだい？

「ところで雄二その人って一体誰？」

ああ、そういえば僕も気になるな吉井君に興味を持っている女の子。

「確か、久保・・・」

久保さんか・・・このクラスにはいないから別のクラスの子だろう。

同じクラスなら見れたのに残念、かな？

「利光だったかな」

久保利光、名前からすると男子だろう。

どうやら吉井君はからかわれたようだ。

吉井君を見てみると・・・。

「・・・」

吉井君は声を押し殺してさめざめと泣いていた。かわいそうに、今度何か奢ってあげよう。

「おい、明久声を殺してさめざめと泣くな」

坂本君が、泣いている吉井君を慰め？ている。

「半分冗談だ、安心しろ」

「え？残り半分は？」

どうやら吉井君へのいじりはまだ終わらないようだ。

僕はこの二人のやりとりを姫路さんと見守る事にした。

始めはやりすぎでひどいと思ったけど二人しばらく見ているとどこか楽しそうに見えてきた。

やっぱりこの二人は友達なんだな。

いじられるのはいやだけど一年間仲良く出来たらいいな。

「ねえ雄二！残り半分は！？」

・・・仲良くできるかな・・・
少し不安になりました。

3話 自己紹介（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからも頑張りますので応援よろしくお願いします。

感想待ってます。

4話 自己紹介 明久編

「明久視点」

僕は吉井明久、少し頭が悪い普通の高校生・・・なのに何故か僕は最低クラスのFクラス

に、おかしい振り分け試験では十問に一問は解けたはず・・・。そんなことを考えながらFクラスの扉の前に立つ、まあ少し遅かったけど軽い感じで行けば

大丈夫だよな？

僕は扉を開けた。

「すみません、遅れちゃいました」

「早く座れ、ウジ虫野郎」

まさかの罵倒、いくらなんでもこれはないんじゃないかと思う。罵倒した男子生徒を見る。

赤い髪にツンツンした不良のような生徒、なんと僕の悪友の坂本雄二だった。

しかし、何故その悪友が教壇に？

僕は気になったので疑問を口にする。

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に立ってみた」

「先生の代わり？なんで雄二が？」

「一応俺がこのクラスの最高成績者だからな」

「え、それじゃあ雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

にやりと笑う雄二、その言葉を聞いて僕も笑う、つまり雄二を説得すればこのクラスを動かせるわけだ。

「これで、このクラスの全員が俺の兵隊だな」

ふんぞり返って床に座るクラスメイト達を見下ろしている雄二。

そう、このクラスの皆は床に座っている。

どうしてか？このクラスにはイスがないからだ。

「それにしても・・・さすがFクラスだね」

先程見ていたAクラスとの差に絶望を隠せないけど、とりあえずあいているスペースを探す。

お？空いているスペースを発見、僕は見つけたスペースに座り隣になるであろうクラスメイトに紳士的に挨拶をする。

「初めまして、僕は吉井 明久よろしくね」

「私は九条 優香です、よろしくお願ひします」

驚いた、僕は隣の人をみて驚愕した。

僕の隣に居たのは黒く長い髪に整った顔・・・そして胸にある巨大なメロン。

まさに絶世の美少女だった。

やった！！！！ついに僕にも春の予感が！！！！！！

これはチャンスだ！こういったお隣同士という関係からドラマが始まり、やがて僕等は結ばれる事になる。
そう、九条 優香さんこの出会いは僕の幸せな未来につなぐ架け橋になる！！
脳内トリップをしていると先生が来て自己紹介が始まった。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる、今年一年よろしく頼む」

木下 秀吉、去年僕と同じクラスにいた友人だ。

おお、九条さん以外にもこのむさくるしいFクラスにオワシスが・・・。
まて！落ち着くんだ僕！！いくら外見がかわいくても秀吉は男だ、騙されるんじゃない！！

そんなことを考えていると次の人が立ち上がり、自己紹介を始めた。

「・・・土屋康太」

土屋 康太、彼も去年同じクラスの友人でムツツリー二と呼ばれる変態という名の紳士だ。

噂では彼の経営するムツツリ商会は教師も利用しているとか・・・。
ちなみに扱っている商品は女子生徒の抱き枕カバーから盗撮写真まで扱っている。

僕もよく買っている。

「・・・です、海外育ちで日本語の会話はできるけど読み書きが苦手です

あと、英語も苦手です育ちがドイツだったので、趣味は・・・」

おっと考え事をしている間に次の人になった、女子の制服を身にまといどこか知り合いに似ている

ポニーテイルの女子。

それにしてもドイツ育ちか……ますます僕の知り合いに似ている。

「吉井明久をグチャグチャにすることです」

誰だ！？恐ろしくかつピンポイントな趣味を持つ奴は！！

「はろはろー」

手を振ってきたのは秀吉たちと同じく去年同じクラスだった島田さん。

たしかに彼女ならあの趣味も頷ける。
ガタガタと震えながら彼女に応える。

「あう……し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

挨拶を終えた島田さんは座る。

なんでこうも知り合いばかり集まるのだろうか？

もしかしてこれが類は友を呼ぶというやつなのだろうか？

認めない！僕がこいつらと同類なんて！！

「……です、よろしくお願いします」

おっとまた考え事をしている間に自己紹介が終わったようだ。

ん？前の人が座ったから次は僕か……。

こういった自己紹介は肝心だ、沢山の仲間を作るためにも、僕が明るい好青年ということアピールしない。

僕はそんな昔の事を思い出しながら姉さんと花嫁のいる待合室の前に来た。

緊張しているのか僕は震える手で扉をノックする。

「明久だけど、今大丈夫かい？」

「はい、大丈夫です」

これから妻になる花嫁から確認をとった後、僕と姉さんは待合室の中へ……。そして……。

「これから、末永くよろしくお願いしますね、あきひ……ダーリン」

ダーリンと呼ばれ戸惑う僕を見た彼女は

まるでイタヅラに成功した子供のように笑う。

彼女……九条さんを見て僕は気を失った。

あれ？ここは……。

気がついた時、僕は血まみれになっていた。

血をハンカチで拭きつつ体を起こす。

周りを見てみると教壇の近くに姫路さんが立っていて自己紹介をしている。

それにしても気絶していた時とその前のことが思い出せない。

何かとてもいい夢を見ていた気がする……。うっくん、考えてもしょうがないし姫路さんの自己紹介を聞こう。

「姫路瑞希といます。よろしく願います……。！」

緊張しているのか声が少し張っている。

それにしても何故彼女がFクラスに？

「はいっ！質問です！」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

クラスの誰かが手をあげ姫路さんに質問をするため手を上げた。

姫路さんは戸惑いながらも、質問に答えようとしている。いい子だ……。

「なんでここにいるんですか？」

ふむ、確かに……。姫路さんの成績なら確実にAクラスだと思っていたのに……

何かあったのかな？

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

なるほど、そういえば先生と一緒に途中退席していたような気がする。

これを聞いたクラスメイトたちは自分達もといわんばかりに言い訳の言葉を

口にす。

「そういえば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭^あったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、幼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

こうして姫路さんは自己紹介を終えて九条さんのとなりに座る。
ちなみに席は

雄二 僕 九条さん 姫路さん

となっている。

そのあと四人で会話をし、一つの決意をした僕は雄二を廊下に連れ出し話をする。

「雄二、試召戦争やってみない？」

4話 自己紹介 明久編（後書き）

明久・・・君にそんな幸せが待っているはずがない！！
一言言っておきます、主人公はBLしません。
これからも応援よろしくお願いします。

感想待ってます。

5話 紅茶大好きFクラス

―優視点―

吉井君が坂本君と一緒に廊下に行ってしまった、さっきはあんなやりとりを

していたけどやはり仲が良いんだな……。

「あなた九条さんよね？」

突然、僕の名前を呼ぶ女子の声に振り返ると吉井君をグチャグチャにすることが趣味の

島田さんがいた。

何のようだろう？

「さっき自己紹介したけど島田美波よ、よろしくね」

「九条優香です、こちらもよろしくお願いします」

改めて自己紹介をする僕と島田さん、どうやら友達になれそうだ。

「今年一年よろしくね、ウチの事は美波でいいから」

「じゃあ私は優香で、一年間よろしくお願いしますね美波さん」

「少し硬い感じがするけど……まあいいわ」

そういったあと美波さんは僕の隣に居る姫路さんの方を見る。

もしかしたら姫路さんにも自己紹介と挨拶をするのかもしれない。

やさしいな・・・美波さん。

「姫路さんウチは島田美波、美波でいいわ、今年一年よろしくね」

「あ、はい、よろしくお願ひします、あと私も瑞希でいいです九条さんもよろしくお願ひします」

「はい、よろしくお願ひします、私も優香でいいですよ」

「はい」

こうして僕に新しい友達が二人できた、この調子でもっと増えると嬉しいな。

それにしても回りの人たちはなんで前屈みになっていたりハアハアしていたり

するのかな？もしかしてこの汚い教室のせいで体調でも崩したのかな？

まあ、つらくなったら保健室に行くだろうと思ひ瑞希さん、美波さんと僕の三人で

仲良く話を続ける。

それからしばらくした後、廊下に出て行った吉井君と坂本君が帰ってきた。

そしてそれとほぼ同時に先生が教卓を運んで入ってきたことで自己紹介が再開された。

・
・
・
・
・
・
・
・

僕の前の人自己紹介が終わわり僕の番となった。

「九条さん頑張って」

「優香ちゃん頑張ってください」

「はい」

吉井君と瑞希さんの応援をつけて僕は自己紹介を始めた。回りも静かになり僕に視線が集中している。

「転入生の九条 優香です、趣味は紅茶と読書に音楽鑑賞です一年間よろしくお願いします」

「そうかどうりで・・・」

「なるほどな」

僕の自己紹介が終わると周りが納得したようなセリフやうんうんと頷いていた。

まあ、当たり前前の反応だよな。

その後も自己紹介は続くのだけど・・・。

「柴田功です、趣味は紅茶です」

「近藤吉宗です、趣味はバイオリンと紅茶です」

なぜか皆さん趣味には必ず紅茶が入っている。

もしかしてこのクラスかなりの紅茶好きが多いの？

どうしよう紅茶は好きだけど趣味と言えるか怪しいレベルなんだけ

ど……。

趣味といてってしまった自分に少し後悔しつつ自己紹介が最後の方になりました。

「須川亮です、趣味はバイオリンを弾くことと紅茶を飲み読書を
する事です」

須川君はお金持ちなのだろうか？もしそうなら父様と認識があるか
もしない。

念のため注意しておこう。

「九条さん、九条さん」

「はい」

隣に居る吉井君に話しかけられたので振り返る。
何なんだろう？

「実は僕……紅茶と読書が趣味なんだ」

「そうなんですか？気が合いますね」

まさかの吉井君も紅茶が趣味だった。

一応ポーカーフェイスで返答したけど確実にまずい……
これは帰ったら紅茶の勉強をしよう。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きな
ように呼んでくれ」

最後は坂本君のようだ

呼び方は普通に坂本君かな？でも仲良くなったら下の名前でもよびたいかも。

「さて、皆に一つ聞きたい」

彼がゆっくりと全員の目を見るように告げる、なんだろうもしかして重要なことなのかな？

さっき吉井君と廊下で会話していた事が関係あるのかもしれない。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

その言葉に僕達も坂本君の視線を追う

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・」

「不満はないか？」

「大ありじゃあっ！！」

Fクラスがクラスメイトたちの叫びでゆれる（そんな感じがした）それにしてもうるさかった、耳がいたい・・・。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そつだそつだ！」

「いくら学費が安いからと言ってこの設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！」

クラスメイトのみんなはそれぞれの不満を口にする、たしかに僕も意義を唱えたいけどこればかりはしょうがないと思う

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

クラスを見渡して何かを言おうとする坂本君、でも僕はここで気づいてしまった。

坂本君が何をしようとしているのかを……。

「これは代表としての提案だが……」

その提案は……

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

6話 試召戦争の前に・・・

「優視点」

「そ、そんなの勝てるわけがないだろ？」

「これ以上設備を落とされたらどうなるんだ？」

「九条さんと姫路さんがいたら何もいらぬ」

坂本君のAクラスへの宣戦布告はあまりにも無謀と思ったクラスメイトたちはイヤだと口々に言う。

たしかに残念な事に戦力差は明らかこういう反応をしてもしょうがないと思う。後、僕と瑞希さんいたら何もいらぬとはどういう意味？

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

坂本君は圧倒的な戦力差を知っているはず、なのに仕掛けるということは何か考えがあるのかな？

「何を馬鹿なことを」

「できるわけないだろ？」

「何の根拠があつてそんなことを」

クラスメイトたちの非難の声

「根拠ならあるさ、このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

堂々と宣言する坂本君だけど要素って？

「それを今から説明してやる」

ニヤリと笑い教壇からクラスメイトを見る坂本君。

「おい、康太、畳に顔つけて姫路と九条のスカートを覗いてないで前に来い、っていうか殺すぞ？」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわっ！？」

必死になつて顔と手を左右に振り否定のポーズを取る男子生徒、たしか土屋君だつたかな？

もしかして僕が男だという事に気づいてそれを確かめるために？

「土屋康太、こいつがああの有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツリーニ

「……！！（ブンブン）」

ムツリーニ……？行動から考えてつまりムツリスケベ？僕の正体に気づいたんじゃないの？

どうやら彼はただ純粹に僕のスカートの中身が見たかったようだ。でも油断は出来ないもしかしたら疑っている可能性もあるのだから。

「ムツツリーニだと・・・？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか・・・？」

「だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ・・・」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・」

「????？」

クラスメイト達がなにか尊敬の眼差しを向けているが瑞希さんは意味がわからないようだ。

まあ、当然だよね女の子だし。

「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

たしか瑞希さんは具合が悪くてFクラスに来たと言っていた、坂本君の言葉を考えるとかなり頭がいいのだろう。

「そつだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

「ああ、彼女と九条さんさえいれば何もいらないな」

どうもさつきから最後の人の言葉が気になる、なんとというか背筋が凍る感覚が……。

「木下秀吉だっている」

ん？木下君も何かあるのかな？

ふと、僕と同じ苦労をしていそうな彼に視線を向ける。

「おお……！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の……」

木下 優子って誰？名字からして木下君の家族かな？
でもそれって成績に関係ないようね？

「当然俺も全力を尽くす」

自信満々の坂本君、その態度にクラスメイト達は希望を見た。

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！」

クラスメイトたちの反応を見ると坂本君も瑞希さんに劣らず頭がいいらしい。

「あと、俺は転校生の九条にも期待している」

「へ？」

今日から通うことになった僕の名前があがるなんて以外だな。もしかして僕の経歴を知っているの？

「そうだよな、あの容姿に気品きつとどこかのお嬢様で頭もいいの
だろう」

「ああ、おれこのクラスでお嬢様を見ることになるなんて思わなかったぜ」

「先生・・・九条さんとにやんにやんしたいです」

「あきらめたらそこでにやんにやん終了だよ」

「世界が終わる前に」

確かにお嬢様っていうのは世間的にめずらしいのかもしれませんがあそこのなんか丸刈りの生徒とぼっちゃりした生徒の言っているにやんにやんとは
なんでしょう？それとこのBGMはなんですか？

「それに、吉井明久だっている」

シーン

あれ？なんででしょう吉井君の名前があがったと思ったら皆静かにな
ってしまっただ。

一体どうしたの？

7話 試召戦争始まります。

―優香視点―

最高潮に高まっていた士気が一気に下がる。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

「誰だよ、吉井明久って」

「聞いたことないぞ」

「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから普通の扱いをーって、なんで僕を睨むの？」

士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

士気が下がり狼狽する、吉井君。

少しかわいそうになってきた。

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは【観察処分者】だ」

坂本君が吉井君を名前を出した理由を言う。

しかし、観察処分者ってたしか……。

「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

クラスメイトの一人が呟く。そうたしかこの学校の制度で観察処分者とは成績に加えてさらに何かしら問題を起こした生徒に先生が与える肩書きで、先生が本来触る事の出来ない召喚獣に触れるようにして雑用を強制させられるんだっただかな？

「ち、違うよっ！ちよっとお茶目な16歳につけられる愛称で」

呟いたクラスメイトに言い訳をする、吉井君だけど、転校生の僕が知っているのにその言い訳は正直どうかと思う。

「そつだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「あの、それってどういうものなんですか？」

瑞希さん知らなかったのか、坂本君たちに質問をする。

その際、何故か僕のほうをチラッと見たのはなんでだろう？

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそついった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

「そつなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

目をキラキラさせる瑞希さん。

でも、瑞希さんが言うような便利な事ばかりではない。

召喚獣がダメージを受ければ召喚者である吉井君にフィードバックされるので

戦いには正直、僕はむかないと思う。

「おいおい。【観察処分者】ってことは試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？」

「だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな」

「気にするな。どうせいてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな？」

このやり取りを見て僕は今後、吉井君に優しく接してあげようと思う。

このままだとあまりにも不憫だ。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すっごい大胆に無視された！」

どうしよう、吉井君がかわいそうを通り越して哀れに見える。

そうだ、今度ウチのメイドさん達に頼んでクッキーの作り方を教えてもらおう。

高校生男子は女の子にクッキーをもらうと喜ぶと学園ドラマでも知っている。

男の僕が吉井君にあげたら気持ち悪い事この上ないけど、今は女の子として通っているから大丈夫なはずだ。

優が見ていたのは恋愛フラグの立たないスポ根ドラマのため、それがどんなに危険なことか気づいていません。

ちなみに優が見たシーンは、決勝戦の数日前に主人公のクラスメイトの女子達が、たまたま家庭科で作ったクツキーを主人公達にあげて、まあ頑張れと応援するシーンだ。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ」
「！」

『うおおーっ！！』

「お、おー・・・」

おおー！まるで僕が見ていたドラマのようだ！！
僕も皆に負けないように頑張ろう！！

7話 試召戦争始まります。(後書き)

どうも作者です。

テストが終わり更新を再開します。

これからも頑張りますので応援よろしくお願いします。

感想や評価をいただければ、作者の今後のやる気に繋がるのでよろしくお願いします。

8話 不幸な吉井君

―優香視点―

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事に大役を果たせ！」

「…ねえ雄二。下位勢力の使者って大抵酷い目に遭うよね？」

演説が終わった後、吉井君と坂本君が何か話しているようだ。近くで聞いてみると、どうやら吉井君が使者を頼まれているらしい。

「大丈夫だ。騙されたと思って行ってみる」

「本当に？」

「勿論だ。俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

「分かったよ。それなら使者は僕がやるよ」

おお！二人の背に夕日が見える！

友情って素晴らしい！！

僕は感動し二人を見る。

いいなあ、僕も混ざりたいな……。

男として転入したのならば簡単に入る事が出来ただろうけど、残念ながら母様の陰謀で僕は女として通っている、とてもじゃないがあの空間には入れない。

はあ、実に残念だ。

思わず軽いため息が出てしまった。

その後、吉井君はクラスの皆から拍手と応援の言葉をもらい、Dクラスへと向かった。

「騙されたあー!!」

そんな叫び声と共に、教室に転がり込む吉井君。

どうやら、相手は敵に容赦のない酷い奴だったのだらう。

相当、酷い目にあつたのか吉井君は息を切らせながら、床にへたり込んでしまう。

そこに、坂本君が吉井君に歩み寄る。

おお！坂本君！吉井君を労ってあげるんだね！！

「やはりそうきたか」

「やっぱり、使者への暴行は予想どおりだったんじゃないか！

「あたりまえだ」

「少しは悪びれるよ！」

どうやら坂本君は吉井君を生贄にしただけのようだ。

正直とても残念だ。

でも、吉井君がこのままだと不憫すぎるし、話しかけて労ってあげよう。

「吉井君大丈夫ですか？保健室に行きます？」

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷さ！」

僕が吉井君に話しかけて、保健室に行くかどうかを聞いた時。吉井君は大丈夫と笑顔で親指を立ててきた。どうやら、大丈夫のようだ。意外と吉井君は、回復力が人より凄いのかもしれない。

「よかった、吉井。その様子なら大丈夫のようね」

「平気だよ、心配してくれてありがとう」

美波さんも心配だったようだが、僕との会話の様子を見て大丈夫だとわかって安心しているようだ。

吉井君も心配してくれる美波さんを見て喜んでいようだし。よかったね。

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！もうだめ！死にそう！！」

吉井君が何故か腕を押さえて転げまわる。

僕、もしかしたら転入する学校を間違えたのかもしれない。そんなことを思いつつ転げまわる、吉井君を温かい目で見守る。

その時のFFF団は……

「くそ！俺が使者に行つてボコられていれば、
優香さんと一緒に保健室に行けたかもしれないのに！！」

「それにしても、吉井の奴。重症なフリをして優香さんの視線を独
り占めずるとは・・・！！」

「俺も、あんな優しい目で見てもらいたい！！」

「『吉井 明久！ぶつ殺す！！』」

嫉妬に燃えていた。

9話 公園の少女

―優香視点―

「それじゃあ、ミーティングを始めるぞ」

その一言を残して、坂本君は教室を出て行ってしまった。

ここで話したくないのか、気分転換に外で話したいのかは、分からないけど

とりあえず、坂本君に続いて外に出た。

「痛かったら、言ってくださいね」

後ろの方から、瑞希さんの声が聞こえ、教室の扉が閉まる音が聞こえた。

あの言葉は、おそらく吉井君に向けた言葉だろう。

優しくていい子だなあ……。

でも、何故だろうか？

髪飾りを見た後から、彼女を見ていると何かを思い出しそうになる。

「あの……優香ちゃん」

「あ、なんですか？」

瑞希さんの事を考えていたら、後ろから瑞希さんに声を掛けられた。なんだろう？

「あの……ですね……」

どうしたんだろう。瑞希さんは急に周りをキョロキョロしました。まるで誰かに聞かれたくないような感じだ。

「少し場所を移しましょう」

「は……はい」

僕が場所の移動を提案した後、誰もいない補修室に移動した。これで、誰かに聞かれる心配はないだろう。

しかし、なんだろうか？瑞希さんの態度を考えると、何か悩み事かな？

なんか青春ばくってドキドキする。

「あの……ですね。優香ちゃんは……その……」

「私が、どうかしたんですか？」

あれ？どうやら話は瑞希さん自身の話ではなくて、僕の話のようだ。僕、なにかしたかな？

「優香ちゃんは……」

「男の子、ですよ……」

「へ？」

僕は彼女の言った事が一瞬、理解できなかったが、すぐに頭を再起動して

彼女の言った言葉を思い出す。

『優香ちゃんは……男の子、ですよ……？』

バレたーーーーー!!!!

い、いや！落ち着け！落ち着くんだ！

ここは、騒がず、焦らず、冷静に……。

「あ……どうして、そう思ったんですか？」

「えっと、覚えていませんか？6年前の事？私達、公園で遊んでたんですよ」

あ……。

もしかして……。

「ユキちゃん？」

もう呼ぶ事がないと思っていた、昔の友達のあだ名。

僕は無意識に口にしてた。

そして、僕の言葉を聞いた、目の前に居る瑞希さんは……。

「はい！ユークン！」

忘れてしまっていた、公園の少女の笑顔と、瑞希さんの笑顔が……重なった。

10話 弟（前書き）

試験も終わりようやく執筆活動が再開できました。

10話 弟

???視点

俺には双子の兄が居る。

昔から何でも出来て、有能な兄が・・・。

子供の頃から周りに兄と自分を比べられ、つらくなって爺さんの家に逃げ出した。

怒られるのではないのかと思ったが、理由を話したらすんなり受け入れてくれた。

両親も「お前が、帰りたいた時に帰ってこればいい」と言ってくれて、嬉しかった。

それから、爺さんの家で生活するようになり、実家には、兄がいないうちだけ

両親に顔を出す、生活が十年続いた。

そして、最近母から電話で、重要な話があるからうちに戻ってきてほしい、

と言われた。

始めは、少し戸惑ったが、兄がいないと聞かされ行く事にした。実家に辿り着き、家に入れてもらう。

メイドに母がいる、リビングに案内される。

「お帰りなさい、幸助。」

「・・・ただいま」

リビングに到着すると、母が笑顔で迎えてくれた。

父が見当たらないが、おそらく仕事だろう。

「幸助、さっそく電話で話した、重要な話を聞いてもらっわ」

ゴクリ

いきなり、重要な話とやらを切り出された俺は、喉を鳴らす。

「実はね……」

「実は……？」

一体、何の話だろうか？

真剣な母の表情からかなり重要な事だと受け取れる。

「実は……貴方には秘密だったのだけど……」

「秘密？」

なんだ？まさかとは思うが実は血の繋がった親子ではないとカミングアウトされるのだろうか？

たしかに俺と兄は双子なのに全然にいていないし、その可能性もあるかもしれない。

「貴方の兄、優は……女の子なの」

「は？」

一瞬思考が停止した。

女？あの兄が？

ははは、何かの間違いだろう。

まったく、何を言っているのやらこのオバハンは

「だから、優は女の子なの」

ミシィ！

「イダダダダダ！ すんません！ すんませんでしたー！！
だから、関節を放してください美人なお母様ー！！！！」

「あらあら、幸助ったら」

にっこり笑って、俺の関節を解放する母。
まったく、何て母親だ。

悪口を一瞬で察知して、関節をきめるなんて。

もしかして図「次は、砕くわ」

なんて事は無いだろう。

母は何時までも美人です。

「で、話の続きだけど、優は女の子なの」

「・・・仮にそうだとして、どうして今まで秘密にしていたんだよ」

「それはね・・・」

それから、母の話を聞かされた。

何でも、兄は昔からなんでも出来すぎたのが原因らしい。

父の方の爺さんが、この歳でコレだけの才能があるのなら

この子に継がせればいい、と発言した。

そして、親族と両親はコネや金を使って女である兄を男に仕立て上

げたと。

「・・・さすがにウソだろ!!」

さすがに無理があるすぎる!

こんな話を聞いて信じるのは相当なバカか、薬をやっている奴だけだろう。

「ハア・・・この手は使いたくなかったのだけど・・・」

ため息をつき、ポケットから一枚の写真を取り出す母。

一体何の・・・。

またまた、思考が停止した。

それもしかたがない、何故なら母が取り出した写真には、水着姿の女が映っていたのだ。

思考が再起動し、よく写真を見る。

豊満な胸に、黒いロングの髪、恥ずかしがっているのか顔は赤く涙目だ。

正直ストライク、俺ごみの女性だった。

もしかして、この写真をやるから兄が女である事を信じると言うのだろうか？

まったく、何を考えているのやら。

俺はとっくに兄が女である事を信じているのに。

「幸助、さりげなく写真を、ポケットに入れなくて」

「・・・」

心の中で舌打ちをし、写真を母に返す。

しょうがないじゃないか！男子校に通っているんだ！

色々と飢えているんだよ！

「で、この写真は、誰だと思っ？」

「いや、わからないけど・・・」

正直わからない。

あんな美人な、知り合いは俺にはいないし、
もしかしてメイドさんか？

「この子は優よ」

「ハア！？」

母から写真を奪い取りよく顔を見る。

・
・
・
・
・
・

本物ダーーーーー！！！！

幼い頃の記憶と照らし合わせると、確かに面影のようなものがある。
しかも胸には本物の胸が！（ムツツリーニすら騙せる人工バスト・
サイズF・1000万円）

つまり、つまり兄は姉で美少女で・・・。

「それでね、幸助。優と同じ学校に通ってほしいの」

こうして、俺が混乱している時に承諾をさせられ、文月学園に転校する事になった。

準備も出来ていて、教科書に制服も新しい住居にあるようだ。

「ここが新しい住所だから、それと、おじい様の所にはもう帰れないから

新しい住所に行きなさい。」

「・・・はい」

こうなった母は、テコでも動かない。

さて、どうなる事やら・・・。

10話 弟（後書き）

感想・評価などをお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2754t/>

バカと女装と召喚獣

2011年12月29日12時49分発行